

私を語る

第24回

H. T. 通信9回

昭和36年 食物学科卒

思い返せば、女子大が自分探しの時でした。私は、戦後、物の乏しい子ども時代を過ごしましたが、料理上手な母の元で、いつも幸せな食卓を囲む家庭で育ちました。そんな中、通信教育課程で学ぶことになり、迷わず食物学科を選んだのでした。スクーリングで、実習や実験を重ねるうち、将来は食品分析のような仕事をしたいと思うようになりました。一方、自分の性格も見えてきて緻密な仕事には向いていないことも分かってきました。

その頃、小学校の図書館でアルバイトをしながら勉強を続けていましたが、この図書館で小学生と競うように子どもの本を読む機会を与えられました。そして、子どもに本を手渡していくことの楽しさ、大切さに気付いて、図書館員を目指すことになりました。

卒業後、司書資格を取り、公務員として公共図書館で司書として仕事をすることになったのです。昭和40年のことでした。石井桃子氏が『子どもの図書館』（岩波新書）を出版された年でもありました。その記念講演が有楽町の朝日新聞社の講堂でありましたが、講演の前に、松岡享子氏（現東京子ども図書館名誉理事長）が「ユルマと海の神」というお話を語ってくださいました。私は、この語り感動し、その時から「お話」の虜になり、子どもに本を手渡す一つの方法としてお話をするようになりました。

後日、東京子ども図書館「お話の講習会」8期生を修了し、語り手として今に至っています。少し回り道をしましたが、自分探しの原点となった女子大での学びに感謝しています。